

## 大隈文書の来歴と刊本・謄写資料について

星 原 大 輔

### はじめに

早稲田大学大学史資料センターでは、二〇〇三年より『大隈重信関係文書』の編纂事業を開始し、大隈宛の日本人和文書翰を翻刻して、毎年一巻ずつ刊行してきたが、二〇一五年三月、第一一巻の刊行を以って完結するに至った。

収録対象は、編纂当時、早稲田大学図書館が所蔵していたものはもちろん、大学史資料センターや佐賀市大隈記念館、さらに全国の各機関などで原本の所在が確認できたもので、最終的に収録総数は七四〇四通となった。<sup>1)</sup>

政治や経済、教育など、幅広い分野にわたって活動した大隈の許には、多種多様の人びとから書翰が送り届けられていた。ここには色々な情報が詰まっていて、現代の我々が当時の世相を知る上で重要な情報源の一つとなっている。ところで大隈の許にあった資料群は、いったいどのような経緯で受け継がれてきたのであろうか。本稿では、まず

現在所在が確認できる「大隈重信関係文書」、特に大隈宛の日本人和文書翰の原本の来歴を整理し、次に大学史資料センター編『大隈重信関係文書』以外の刊行本・謄写本の概要や作成経緯等を紹介し、最後に関係文書の本来あった状態を検討する。なお、以下、大学史資料センター編『大隈重信関係文書』をセンター本と、日本史籍協会編『大隈重信関係文書』を史籍協会本と略記する。

### 一 原本の伝来——明治一〇年代の資料整理

周知のとおり、大隈は一八六九（明治二）年三月徴士参与兼外国事務局判事に任ぜられて以降、会計官副知事、大蔵大輔、民部大輔、参議、大蔵卿など、明治一四年政変で下野するまで、明治政府の要職を歴任した。電信がようやく普及し始め、電話はまだ存在しない時代である。岩倉具視や大久保利通ら政府首脳をはじめ、担当省庁の官吏やお雇い外国人などから、夥しい数の書類や書翰が大隈の許に日夜届けられていた。

こうして大隈の手許に集積した資料群が、最初にまとまった形で整理されたのは、一八八二（明治一五）年九月頃と推定される。早稲田大学図書館蔵「大隈文書」中の、神山聞編「手東人名録」<sup>(2)</sup>の凡例に、次のように記されている。

明治初年以降信友諸公より寄贈の公私書簡、日進增多なるに因り、紙囊を製し之を収蔵し、右其姓の首字を采り伊呂波を以て之を類別し、此目錄を作り他日の探索に便す。且つ余紙を存するものは、将来来簡ある毎に追加の用に供す。

明治十五年九月

受命神山聞識

神山は佐賀出身の大蔵官僚で、明治一四年政変を機に掛冠している<sup>(3)</sup>。その後の詳しい足取りは不明であるが、大隈の

傍にしばらく活動していたことを示す資料が残っている。<sup>(4)</sup>この神山が資料群の整理を命ぜられ、差出人をイロハ順で類別し、それぞれの通数をまとめて書き記したのが、前掲資料「手東人名録」である。

ここに記されている書翰数と、今回のセンター本に収録された書翰数を比較すると、かなりの違いが見られる。例えば、一八八二年九月の時点で死去している明治三傑で見ると、大久保利通は「手東人名録」四九通に対してセンター本は三〇通、木戸孝允は「手東人名録」三〇通に対してセンター本は一四通、西郷隆盛は「手東人名録」三〇八通に対してセンター本は一通となっている。また一八八三年七月に亡くなった岩倉具視の場合、「手東人名録」三〇八通に対してセンター本は二〇五通となっている。連名書翰の取り扱いの違いなどもあり、単純に数字を比較するだけで判断すべきではないかもしれないが、神山の整理後に相当数の大隈宛の日本人和文書翰が失われた可能性は高いと言えよう。

では、何故この時期に資料整理が行なわれ、そしていくつかの資料が失われてしまったのか。この疑問を考える上で重要な示唆が、市島の談話「大隈家の書簡調べ」にある。

自分が久しく聞いている所では、大隈家の大切な文書なるものは曾て小野梓君が故老侯の伝記を編纂することを企て、その材料にあてんとて文書のうちでも重要なものを大行李に詰め、自分の宅へ持帰って大切に預っていたのであったが、何故か小野君が歿すると同時に預っていた文書全部が紛失してどこへ行つたか解らなくなつたと云ふことである。此一と行李もある文書の内には恐らく維新前からの故老侯の経歴を語る多くの者があつたであろうが、夫は小野君以外吾々親近者と雖も曾て見たことのない、従つてどんなものが預けられてあつたか付度も出来ないやうなことであつて、実に惜しいことをしたものであると思つているが、かくの如く文書のなくなつたと云ふことだけは確である。自分は故老侯在世中にそのことを尋ねてみたこともあつたが矢張事実だと言われていた。<sup>(5)</sup>

早稲田大学図書館所蔵の「大隈公政畧記」<sup>(6)</sup>が、市島の言う「小野梓君が故老侯の伝記を編纂することを企て」に該当する資料であろう。これは草稿の状態で、明治三年の参議就任までの記述にとどまっている。なぜなら、小野は資料を集め、大隈より聞き取りをしながら、一八八二(明治一五)年二月より執筆を開始したが、残念ながら、一八八六年に病死したため未完に終わったからである。<sup>(7)</sup>

つまり市島の談話から、次のような経緯が推定される。小野による伝記執筆が企画されたため、まず神山が資料の調査・整理を行なうことになった。そして、小野は整理済みの資料群から執筆材料となる大隈宛書翰を数点借り入れたが、完成することなく夭折した。その後、これらの資料は彼の死後に大隈家へ返却されることなく、所在そのものが分からなくなってしまった。

小野の借入に関する資料が存在しないため、残念ながら、その数量や内容を知る術がない。もし、今後新たに発見される大隈関係の資料群が、小野が借入したものであった場合は、センター本はもちろん、史籍協会本にも収録されていない、まったくの新出資料ということになる。

## 二 原本の伝来——大隈没後の市島謙吉による資料整理

その後政党の代表として、また早稲田大学の創立者として、日本社会にさまざまな影響を与えた大隈の許には、その後も多くの書翰や書類などが届き、大隈邸の片隅に集積していた。この間、大隈家でこれらを体系的に整理した形跡はなく、それどころか、その存在自体が大隈周辺の人びとに知られずにいたようである。これらの資料群の存在が世に知られたのは、大隈の死後のことであった。

一九二二（大正一一）年一月一〇日、大隈は不婦の客となった。享年八三。一七日には日比谷公園で国民葬が行なわれ、遺体は護国寺に埋葬された。葬儀後の一月二二日、市島は高田早苗や第二代総長塩沢昌貞と、「総長没後早大善後（ア）に関する重要な内議」を行なっていて、大隈の伝記編纂については次のように決定している。

大隈侯伝記編纂会を起し、学校其他侯に縁故ある各方面之団体参加し、編纂に着手之事。これは学校之事業とせず、唯た学校のこれに参加すべきを維持員会にて決定を要す。此の件の具体案は余より提出之事。<sup>(8)</sup>

大隈の伝記編纂に関する記述はこれが初出ではなく、大隈が死去する前から市島の日記に記されている。大隈は九月二六日に床に臥し昏睡状態に陥るなど、一時は容態が急速的に悪化した。幸い一〇月末に危機的状况から脱したが、予断を許さない状況には変わりはなかった。そこで市島は大隈の事績を後世に伝えるべく、伝記編纂の事業計画を思い立つたらしい。市島は一九二一年一月二日、高田早苗を訪ねて相談している。

晴、今朝高田（早苗、以下ハ）内は筆者による補注を動坂に訪ふて、大隈侯の伝記を編纂する件に付協議す。先づ材料蒐集を始むること、し、大学の維持員会に提出し其の決定を得て、経費を支出することの大要を定む。（中略）大隈邸に到り、大隈侯伝記材料蒐集に付大隈信常の諒解を得てかへる。<sup>(9)</sup>

このように、大隈家の新当主の信常と高田の諒解は既に得ていて、そして大学総長の塩沢の同意も得たので、事業計画は一気に具体化していった。一九二二年一月二四日に大隈邸で開かれた残務委員会で伝記編纂会の件も協議され、<sup>(10)</sup>二七日の早稲田大学維持員会で「大隈侯伝記編纂会之大要」が発表された。<sup>(11)</sup>こうして二月二八日、大隈邸で行なわれた五十日祭において、市島が参列者に伝記編纂会の発足を公表する運びとなった。<sup>(12)</sup>

市島はこの編纂事業を本格的に始動させるべく、組織案や規約、予算案などの作成にも奔走していた。その最中の三月二日、突如、市島は綾子夫人から呼び出しを受けた。

大隈未亡人（大隈綾子）より急に招かれ、十時到着。高田（早苗）も同じく招かれて、共に病牀に就て面会。未亡人より老侯（大隈重信）の蔵に係る重要書類少からず、右は焼棄すべきや否、若し伝記の材料に供せんとすれば取捨整理ありたしと、特に余に相談あり。余は漫りに焼棄を不可とし自ら整理せんことを申出<sup>(13)</sup>つ。

大隈の手許に集積されていた資料群の存在が、ここで綾子夫人以外の者に遂に知られることになったのである。伝記編纂を進めていくうえで、一次資料は必要不可欠である。市島は「焼棄」の不可を告げ、自ら整理に当たることを申し出たのである。

日記『双魚堂日誌』のその後の記述から、市島が三月六日から数回にわたって大隈邸に赴き、資料群の調査・整理を行なったことが確認できる。大正一一年の大晦日、市島はこの経緯等を以下のようにまとめている<sup>(14)</sup>。

尚、当夏期中十数回毎回五時間以上に至り力を注ぎたるは、大隈家に蔵する維新以来の名家の書簡式千通を翻訳し、其の保存すべきものと否と、その伝記の材料となるものと維新史などの資料となるものを選択したることにて、伝記の材料となるべきものは特に謄写せしめ、其の数千七、八百枚の多きに達したり。此の調査の仕末は文明協会の講演集并に北越新報に連載せり。報知社大隈侯に縁故深き関係より、新築記念に侯所蔵の書簡を瑠璃版に付し卷子として配布を欲し、余に囑して撰択せしめたり。余亦之れに付するの解説一冊を撰ひ与へたり。此等は此事なれども書簡調べの結果なるを以て爰に録しておく。

市島による資料群の調査・整理について触れる前に、右の文章の内容に補足を二つ加えておきたい。

一つは、「此の調査の仕末は文明協会の講演集并に北越新報に連載せり」との記述である。前者は、大日本文明協会が発行した『文明協会講演集』第七（一九二二年九月）、第一一（同年二月）に二回にわたって掲載された「大隈家の書簡調べ」である。後者は六月中旬に北越新報の紙上に掲載されたことが日記に記されているが、残念ながら現物は確認できていない。

もう一つは、「報知社」云々という記述である。『報知新聞』<sup>15</sup>の発行元である同社は、創業五〇年に当たる一九二二（大正一一）年の八月末、新社屋を竣工した。<sup>16</sup>同社は一八八一（明治一四）年に大隈が経営権を得て以降、大隈とのつながりがあったことから、この「社屋新築の記念」として、大隈家に遺されていた書類一点と大隈宛の書翰二四通の<sup>17</sup>コロタイプ印刷を卷子に仕立てて刊行したのであった。これが『風雲感会』である。題名は、武富時敏が後漢書と李白の漢詩から命名した。また収録する書翰の選定は市島に一任され、卷子に付随した冊子には『風雲感会』<sup>18</sup>についてと題する市島の解題が収録されている。

さて前述したように、市島による資料群の調査・整理の詳しい経緯は日記の記述から追うことができるし、その概要は前掲の談話「大隈家の書簡調べ」等で知ることができる。ここではこれらの記述を基に、その特徴と問題点を指摘しておくたい。

第一に、極めて少人数で行なわれていたことである。日記を読む限りでは、市島の他に、この調査・整理の実務にあたったのは、光吉元次郎、町田忠治、中野礼四郎だけである。大隈文書の存在自体はすぐに世に知られたけれども、その内容を知ることができた人物は非常に限られていた。

第二に、資料群の現状が、大隈死去時のものから大きく変更されていることである。資料調査整理の初日、市島は以下のように日記に記している。

〔大隈〕侯〔爵〕夫婦の寢室十畳二間に、官文書類書物箱約三十、書状入トランク五個、合利入六七個、大風呂敷包約十個。此内明治十四五年の文書整理を施したるもの二、三トランクに入れあるもの、外は雑然たるものにて、半日を費し合利三個程の不用書類を除外す。<sup>(18)</sup>

市島もこれほどの量の資料が残っているとは思っていなかったらしい。ところで、ここで気になるのが「合利三個程の不用書類を除外す」という記述である。これらのその後の取り扱いなどに関して、これ以降全く記されていない。そしてこの約四ヶ月後には、次のような記述もある。

十時より大隈邸に到り、書簡調を為す。四時に至る。今日十回目にて重なるもの閲了。これより甲乙丙三等に別ち、卷子とすべきもの、草々に保存すべきもの、保存を要せざるものを選び分ける方針を定め、尚西三度参邸の筈也。<sup>(19)</sup>

つまり市島によって、資料群は「卷子とすべきもの」「草々に保存すべきもの」「保存を要せざるもの」の三種に分類して整理されたのである。しかし、その基準をどう定めたのか、それに関する記述はない。これは客観的というよりは、市島の主観によるところが大きいであろう。そしてやはり気になるのが、「保存を要せざるもの」と認定された資料のその後の取り扱いである。これについても言及がない。

第三に、重要書翰の謄写を行なっていたことである。大正一一年大晦日の記述にも「伝記の材料となるべきものは特に謄写せしめ、其の数千七、八百枚の多きに達したり」とある。これに該当する資料が、小精廬主人編「大隈家収蔵文書」<sup>(20)</sup>であろう。「大隈侯伝記編纂会」の用紙が使用されていて、その序文には



爾来式十六函に納めたる書簡を点検し、為めに十数日を費したれども、全部を通覧したるにあらず、但た伝記の材料となるべき特に重要なものを随つて見れば随つて写手に廻したる、哀然千余枚に及ひたり。(中略)これは予か自から選択し且つ伝記の資料に充てたるものにて、予には紀念すべき因縁あるものなり。仍て散佚を慮り、今次製本して家に蔵することとなせり。

とある。当該資料の内容については、早稲田大学史資料センター編『大隈重信関係文書』編集担当「早稲田大学図書館所蔵市島謙吉編「大隈家収蔵文書」(抄録)」に詳しいので、そちらを参照されたい。そこでも指摘されているように、原本の所在が現在分からず、後述する史籍協会本にも収録されていない謄写書翰も多数あり、大隈研究を進めていく上で貴重な資料の一つである。<sup>(22)</sup>

以上から分かるように、大隈死後にあつた資料群は当初の原形をとどめておらず、市島による判断の下で選別され、再分類されているのである。さらに整理・分類の過程で、「不用書類」「保存を要せざるもの」と判断された資料がいくつか存在し、そして破棄された可能性も否定できないのである。

### 三 原本の伝来——大隈家からの資料寄贈・進呈

こうして市島による調査・整理を経た資料群は、のちに大隈家から早稲田大学に寄贈される。まず一九二二(大正一二年)一月、大隈家から大隈邸と庭園が早稲田大学に引き継がれた際に、図書や書類を中心とした資料群が寄贈された。<sup>(23)</sup> ついで一九四九(昭和二四)年六月の第一回大隈記念祭を機に、大隈家から書翰を中心とする資料群が寄贈された。<sup>(24)</sup> これらは現在、早稲田大学図書館に「大隈文書」として所蔵されていて、前者がA官庁関係文書、C欧文書

翰類に、後者がB書翰類に分類されている。また一九七六（昭和五一）年五月にも、大隈家から早稲田大学大学史編集所（現大学史資料センター）に書翰を中心とする資料群が寄贈されていて、現在「大隈重信関係文書」として所蔵されている。<sup>25</sup>

ところでセンター本に収録されている大隈宛の日本人和文書翰のうち、右とは異なる経緯で伝来したものも多数あり、そのなかには、大隈家から大隈重信に縁のあった個人と団体に進呈されたものも含まれている。

まず大隈家が個人に進呈した分については、早稲田大学大学史資料センターが所蔵する「昭和参年九月 進呈書翰目録」<sup>26</sup>に、進呈された人物の氏名と、進呈された大隈宛書翰の差出人と通数が記されているので、ここから概要が確認できる。これによると、進呈先は高田早苗ら一九名で、その総計は三二七通となっている。

その一人である市島謙吉は、一九二八（昭和三）年九月四日、大隈信常に呼ばれて大隈宛書翰一五通を進呈された。彼は日記「戊辰漫録」に、この日のことを次のように記している。

先妣〔大隈綾子〕の遺志に基くと候爵〔大隈信常〕の書簡にあり。これは従来大隈家より寄せられた種々のもの、内で尤も意義の深いことである。自分は大隈家の書簡調べに前年十数日没頭した縁因もあり、此賜を受くるは尤も愉快とする所で、装黄家に伝へんことを欲する。目録は左の如くと、〔中略〕ケ様に縁故者に此の書簡を頒たれたるは先侯爵夫人の遺志にもよるが、実は熊子夫人の篤志によるのである。（中略）兼ねて老侯夫人の遺志もあれば若干を検別して昵近の人に与へたと、熊子刀自より青山の大隈侯へ交渉あり。其の結果五六十通ほど取別けられたり。其際自分に相談あり、如何なるものを諸家へ頒つべきかと。自分のいふには、尤も大切な時局に関するもの、如きは成巻家に存せらるがよろし、さりとて余り無意味なものを人に贈られても人は喜ぶまじ、多少の意味あるものを贈らる、がよからんと。自分は熊子刀自のみつから検出されたものを一々検し、代筆十通余を除き去りたり。表装されて青山に蔵せらる、こと、なりては一通も世間に出ることはなるまじ。幾何

かても吾等の有に帰したるは誠に仕合といふべし。<sup>(27)</sup> (後略)

綾子夫人は生前から「昵近の人」に大隈宛書翰を進呈する意思を示していたようである。大隈の娘熊子も同様に考えていたので、当主の信常から承諾を得た上で、市島に各人にどの書翰を譲るべきかを事前に相談していたのであった。こうして昭和三年九月、大隈家に保存されていた書翰の一部が、一九人に分配されたのである。

現在、その原本の所在が確認できるのは、次の五名が譲り受けた分である。以下、その氏名と所蔵先、そして大隈との関係を簡単に記しておく。

一人目は、高田早苗（一八六〇（安政七）～一九三八（昭和二三））である。早稲田の四尊の一人で、早稲田大学初代学長や第三代総長などを務め、学校経営の第一線に立った。また衆議院議員も六期務めていて、大隈の政治活動を支えた。<sup>(28)</sup> 高田旧蔵資料は現在早稲田大学図書館が所蔵し、卷子一卷に一七通が表装されている。<sup>(29)</sup> なお、卷子が収められている桐箱には、早稲田大学に縁ある三人の書入れが存在する。一つは蓋表に、市島謙吉の自筆で「風雲書簡 大隈家旧蔵 春城敬書匣」とある。もう一つは蓋裏に、會津八一の自筆で「此巻旧在隈侯秘笈。後帰於半峰高田博士。遂次梅澤慎六君所獲。維新雋豪。雲集電馳。扶翼天日。克成鴻業。尺素尚帶風雷。可称偉觀也。秋艸道人題匣」とある。そして箱底に、高田早苗の自筆で「大隈熊子刀自所贈 半峰記」とある。

二人目は、先述した市島謙吉（一八六〇（安政七）～一九四四（昭和一九））である。彼も早稲田の四尊の一人で、初代図書館長として日本有数の大学図書館を築き上げた。この他にも大学基金募集委員、維持員などを歴任し学校発展に大きく寄与したことで、名誉理事の称を受けている。<sup>(30)</sup> 市島旧蔵資料は現在早稲田大学図書館が所蔵し、卷子二巻に全一五通が表装されている。<sup>(31)</sup>

三人目は、塩沢昌貞（一八七〇（明治三）～一九四五（昭和二〇））である。欧米留学後に早稲田の教壇に立ち、経済学や財政学を講義する一方で、また大学部政治経済学科・専門部政治経済科長、理事、第四代学長、第二代総長などを務め、学校発展にも尽力した。経済学の泰斗で英語に長けていたため、外国要人が大隈邸を訪れた際には決まって通訳として立ち会ったという。<sup>(32)</sup> 塩沢旧蔵資料も現在早稲田大学図書館が所蔵し、全一七通。<sup>(33)</sup>

四人目は、中野礼四郎（一八七二（明治四）～一九六四（昭和三九））である。中野家は佐賀藩の家老格の家柄で、祖父数馬も父致明も大隈と知己の関係にあった。礼四郎は東京帝国大学国史科を卒業した後、早稲田大学で国史の講義を担当し、のちに早稲田中学校第三代校長となった。<sup>(34)</sup> 中野旧蔵資料は現在早稲田大学大学史資料センターが所蔵し、卷子二巻に全一八通が表装されている。<sup>(35)</sup>

そして五人目が、増田義一（一八六九（明治二）～一九四九（昭和二四））である。東京専門学校卒業後、光岡威一郎が立ち上げた大日本実業学会が創刊した雑誌『実業之日本』の編集にあたり、のちに同誌の発行権を譲り受けて、実業之日本社を創業し初代社長となった。大隈は、同社が刊行する雑誌に、多くの記名文書を発表している。<sup>(36)</sup> 増田旧蔵資料は現在早稲田大学大学史資料センターが所蔵し、卷子一卷に一七通が表装されている。<sup>(37)</sup>

以上、彼らが大隈家から進呈された計八四通の大隈宛書翰は、今回のセンター本にすべて収録された。この他の人びとに進呈された分は、残念ながら、原本の所在が不明である。以下、前掲資料「昭和参年九月進呈書簡目録」を基に、その氏名と大隈との関係を簡単に書き記しておく。

- ・ 武富時敏（一八五六（安政二）～一九三八（昭和二三））。佐賀県出身。大隈が率いた立憲革新党、進歩党、憲政本党に所属し、第一次大隈内閣では内閣書記官長、第二次大隈内閣では通信大臣、大蔵大臣を務めた。

- 矢野文雄（一八五一（嘉永三）～一九三二（昭和六））。大分県出身。慶應義塾卒業後、福澤諭吉の紹介で大隈の知遇を得て大蔵省に出仕したが、明治一四年政変で辞職。その後、立憲改進黨に参加し、東京専門学校創立委員に就任するなどした。
- 町田忠治（一八六三（文久三）～一九四六（昭和二一））。秋田県出身。一九二二（明治四五）年の総選挙で当選した後、衆議院議員として活動した。第二次大隈内閣では、農商務参政官に抜擢されている。大隈が亡くなった当日も大隈邸に詰めており、市島と共に大隈宛書翰の整理に当たった。
- 阪本三郎（一八六七（慶応三）～一九三二（昭和六））。東京専門学校（現早稲田大学）を卒業した後、東京地方裁判所判事や東京控訴院判事などを歴任。一九〇〇（明治三三）年、早稲田最初の派遣留學生としてドイツに渡り、ドクトル・ユリスの学位を取得して帰国、早稲田の教壇に立った。第二次大隈内閣が成立すると、秋田県知事、山梨県知事を務めた。鮫島武之助（一八四八（嘉永元）～一九三一（昭和六））。鹿児島県出身。大隈が一八八八（明治二一）年に外務大臣に就いた時は、秘書官として条約改正交渉の推進に尽力した。翌年一〇月一八日、大隈が爆弾を投擲された際には、加藤高明と共に真っ先に駆け付けたという。<sup>(38)</sup>
- 坂本嘉治馬（一八六六（慶応二）～一九三八（昭和二三））。高知県出身。小野梓が経営する東洋館書店に入社し、小野が亡くなると、一八八六（明治一九）年に富山房を立ち上げ、辞典・学術書・教科書を刊行した。のちに大隈に直接掛け合っており、一九一一年四月には、大隈主宰の雑誌『新日本』の発行を開始した。早稲田大学の校賓の一人。<sup>(39)</sup>
- 原田二郎（一八四九（嘉永二）～一九三〇（昭和五））。三重県出身。井上馨からの要請で鴻池銀行の財政を立て直し、関西財界の重鎮となった。一九一四（大正三）年に第二次大隈内閣が成立した際、井上馨との間を取り持ったことで、家族ぐるみで交流するようになったという。のちに軽井沢の土地を寄贈するなど、早稲田大学の校賓となった。<sup>(40)</sup>
- 稲田龍吉（一八七四（明治七）～一九五〇（昭和二五））。愛知県出身。ワイル病の病原体スピロヘータを発見し、一九一九（大正八）年には、共同研究者の井戸泰とノーベル生理学・医学賞の候補にもなっている。一九二〇年東京帝国大学教

授に就任した頃から、毎月二回大隈を診察するようになり、臨終にも立ち会っている。

- 野口能毅（一八六〇（万延元）～一九四〇（昭和一五））。佐賀県出身。大隈の葬儀委員長を務めた波多野敬直の弟。一九一二（明治四五）年から一九三一（昭和六）年まで佐賀市長を務めた。一九一七年の大隈最後の帰郷を機に、佐賀では生家保存を目的とする「大隈侯爵記念事業」が始まり、野口はその先頭に立って、生家と土地の買収、記念碑の建立に貢献した。

- 副島延一（生没年不明）。佐賀県出身。父親が大隈と竹馬の友であったため、雉子橋邸時代から大隈家に出入りしていた。その後、事業を始めてからも、大隈家と親密な交流を持ち続けたという<sup>(41)</sup>。

- 田尻鉄太郎（一八八三（明治一六）～一九六二（昭和三七））。鉄太郎の母ヨシが綾子夫人の兄三枝守富の長女で、大隈の姪にあたる<sup>(42)</sup>。

- 真木平一郎（一八六九（明治二）～一九四五（昭和二〇））。妻の知恵子が綾子夫人の兄三枝守富二女で、大隈の養女となっている。したがって大隈の婿にあたる<sup>(43)</sup>。なお父長義は佐賀出身。

- 三枝守博（一八八六（明治一九）～一九七五（昭和五〇））。大隈の義兄三枝守富の長男<sup>(44)</sup>。

- 光吉直子（生没年不明）。大隈家に長年勤めた女性のひとり。戦後大隈研究室が主宰した座談会「大隈侯の家庭生活を語る」に参加している<sup>(45)</sup>。

次に、大隈家から大隈宛書翰が進呈された団体であるが、それは鍋島侯爵家徴古館と大隈誕生記念館で、一九二八年一月に大隈家が進呈した際に添付された書翰の草案が現存している<sup>(46)</sup>。ここでは、前者の鍋島侯爵家徴古館長宛書翰案の全文翻刻を掲げておく。

徴古館侯爵より被贈事之御書面の案文

向寒之候貴館益々御隆盛之段欣賀之至に奉存候。扱別便に而差上候巻軸は、先考在世中諸先輩より寄せられたる書翰に有之、篋底に秘蔵候も不本意と存候付、今回装填之上乾坤両軸となし別て芳名録相添へ贈呈致申候。幸に永く貴館に御保蔵被下候へは小生之本懐不過之候。為得貴意度如此に御坐候。敬具

ここに「芳名録相添へ」とあるように、それぞれに進呈する大隈宛書翰の差出人名の一覧の写しが別紙として残っている。これによって、全部で七〇通が進呈されていたことが確認できた。さらにこの人名一覧を基に検討した結果、前者は公益財団法人鍋島報效会所蔵「大隈重信宛書翰集」が、後者は佐賀市大隈記念館所蔵「大隈重信関係文書」が該当すると考えられる。なお、これらも今回のセンター本にすべて収録された。

以上のように、大隈家から二度にわたって早稲田大学に資料群が寄贈された以外にも、今回のセンター本の編纂過程で、一九二八年、鍋島侯爵家徴古館、大隈誕生記念館、個人（高田早苗ら一九名）に、大隈宛の日本人和文書翰の進呈があったことが判明した。しかし、これらのうち原本の所在が確認できるものは少なく、その大部分は所在不明となっている。

#### 四 刊行本・謄写本——臨時帝室編修局作成の謄写本

ここまで大隈重信関係文書の原本の伝来について述べてきた。このうち、二〇一五年三月時に原本の所在が確認できた大隈宛の日本人和文書翰はセンター本にすべて収録され、内容等を容易に把握することが可能となった。しかしその編纂・調査の過程で、現在では原本の所在が判明しない多くの謄写・活字書翰が、日本史籍協会編『大隈重信関

係文書』や各種の謄写本に存在することも明らかとなった。以下、この点について述べていきたい。

最初に取り上げるのは、臨時帝室編修局作成の謄写本である。臨時帝室編修局（当初は臨時編修局と称した）は一九一四（大正三）年二月、『明治天皇紀』編修のために設置された。同局が収集した各種資料は、現在、宮内庁宮内公文書館に所蔵されていて、ほとんどが一般公開されている。そのなかに、伊藤博文や井上馨ら政府要人の諸家から借り受けた原本の謄写本もあり、「大隈侯爵家所蔵文書」「大隈侯爵家文書」「大隈侯爵家文書・諸家書翰」と題する謄写本が計二六冊存在することがデータベースから確認できる。<sup>(47)</sup> 後述するように、臨時帝室編修局は一九二八（昭和三）年から数年かけて、大隈家が所蔵していた資料群、特に書翰を中心に借り入れて謄写本を作成していたのである。

ここで余談ではあるが、同局の借入要請を受けて、大隈家で生じた二つの動きを紹介しておきたい。一つは、書翰の表装である。同局が借り入れを申請した際、市島は大隈信常に左のような進言を行っていた。

明治史編纂所より大隈家の書簡を借覧したしと申来つたのが動機となりて、自分は大隈（信常）侯（爵）に勧めて、成巻装黄の上貸さるべし、否らされば散佚の憂あるのみならず、或は成巻の機を失せんと。侯もそれを可とした<sup>(48)</sup>

前述したように、市島は資料群を三種に分類していたが、このうち「草々に保存すべきもの」に分類し未装であったものを卷子に仕立てるよう促したのである。現在、早稲田大学図書館所蔵「大隈文書」の書翰の多くが卷子に表装されているのは、こうした事情があったからである。

もう一つが、大隈家で改めて資料目録の編纂が試みられていることである。一九二八年八月、阪本三郎と前田多蔵によって「信書及文書目録」が作成され、資料群は「秘信書目録（御保存之部）」一五三点、「風雲偉觀風雲感念所載分」一七八点、「整理之部」二八一七点、「未整理之部」四九袋・匁一匣と分類されている。そしてその後、書翰について



は「書巻目録」「御書翰巻物帳」も作成されている。このうち「書巻目録」は途中から「臨時帝室編修局用紙」が用いられているので、臨時帝室編修局への借出と同時並行で、作成が進められたのであろう。

さて宮内公文書館には、臨時帝室編修局が資料調査を行なった際の借用書などが綴じこまれた資料があり、また各謄写本の表紙裏には、「台本出処」「採集人名」「採集年月」「校正」「謄写人名」が記されているので、謄写本の作成過程を知ることができる。これらの情報を基に、各謄写本の概要を紹介したい。

① 「大隈侯爵家文書澤宣嘉以下一九人書翰九一通」一冊<sup>(53)</sup>

臨時帝室編修局が、一九三〇（昭和五）年一月から翌年二月の間に、大隈信常から三回に分けて借り入れた諸家書翰卷子計八八巻から、『明治天皇紀』編纂に必要な書翰を謄写したものである。責任者は渡辺幾治郎で、校正は寛文吉（書記）・太田鉄治郎（囑託）、謄写は武清文・佐藤威徳（以上、雇）・織部辰雄・佐治為善（以上、筆生）が担当した。この底本となった卷子は、現在早稲田大学図書館が所蔵していて、謄写された書翰もセンター本にすべて収録されている。

② 「大隈侯爵家所蔵文書」二二冊<sup>(54)</sup>

臨時帝室編修局が、一九二八（昭和三）年から翌年にかけて、『明治天皇紀』編纂に必要な書翰と書類を謄写したものである。責任者は渡辺幾治郎で、校正・謄写は複数人で分担している。校正は太田鉄治郎（囑託）・堀元恭（筆生）・有田利雄・佐藤威徳（以上、雇）が、謄写は織部辰雄・尾本景敏・尾本良三・河野通史・佐治為善・堀元恭（以上、筆生）・榎元半重・名越常一・長尾景敏（以上、筆耕）が担当している。

この謄写本「大隈侯爵家所蔵文書」の底本は、二種類ある。一つは、①と同じく、大隈信常が所蔵する諸家書翰卷子の原本である。もう一つが「大隈侯爵家所蔵（大日本文明協会保管）」とされている謄写綴である。つまり、前述し

た市島が伝記編纂の際に作成した謄写本「大隈家収蔵文書」以外の謄写資料が、大隈家に存在していたと推定されるのである。この謄写綴を底本とした「大隈侯爵家所蔵文書一 五代友厚書翰」<sup>(55)</sup>の内表紙には「十六通（四十三通の内）」という書き込みがあるので、相当数の書翰が謄写されていたのであろう。残念ながら、これに該当する資料は、現在、見当たらない。ただ、この謄写綴が底本として用いられていることは、この時点で、いくつかの原本が大隈家には存在していないことを意味する。

この謄写本「大隈侯爵家所蔵文書」の大部分はセンター本に収録されていて、未収録分も市島による謄写本「大隈家収蔵文書」に存在する。ただし「大隈侯爵家所蔵文書一」にある（明治七）年四月十三日付の大隈重信宛五代友厚書翰<sup>(56)</sup>だけは、他の刊行物や謄写本にはない、ここでもしか知ることができない資料である。

なお一つだけ、特殊な底本が用いられている。謄写本「大隈侯爵家所蔵文書一九」には、一八八一（明治一四）年八月二日付の大隈宛伊藤書翰と、伊藤宛黒田清隆書翰の別紙が謄写されている。渡辺が大隈家から借用した巻紙が底本となっているが、これは大隈家が作成した複製物で、原本は長崎市に在住する個人が所蔵する旨が記されていた。同書翰の活字は史籍協会本に収録されているが、原本の所在が現在分からないため、今回のセンター本には収録されていない。

### ③ 「大隈侯爵家文書・諸家書翰」四冊<sup>(57)</sup>

この謄写本には、書翰三八五通といくつかの書類が謄写されている。上記の①②とは違って、二つの疑問が存在する。一つは、底本の情報と謄写時期が全く分からないことである。①②は底本と謄写時期などを確認できる手がかかりがあったが、この謄写本の表紙裏には「台本 大隈侯爵家」「昭和五年一月校訂」「昭和七年六月製本」と書かれているだけで、臨時帝室編修局と大隈家との間で交わされたはずの借入書も関係書類中に見当たらない。

もう一つが、センター本のみならず、史籍協会本をはじめとする刊行本や他の謄写本にはない謄写書翰が多数存在することである。謄写された三八五通のうち、大隈宛（連名を含む）は三二一通である。このうち一通だけしかセンター本には収録されていない。<sup>(58)</sup>つまり、残りはすべて原本の所在が現在不明となっている。さらに史籍協会本または市島による謄写本「大隈家収蔵文書」に収録されているものが少なく、この謄写本「大隈侯爵家文書・諸家書翰」にしかない謄写書翰は、二〇〇通以上にも上る。明治二〇年以降の書翰の謄写が存在するので、前述した、小野梓没後に紛失した書翰群の可能性はない。表紙裏に「台本 大隈侯爵家」と記録されていることから、現在伝来しているものは別の資料群の原本あるいは謄写本が、「昭和五年一月」時には大隈家に存在していたと考えられる。

以上のように、一九二八（昭和三）年以降、臨時帝室編集局は大隈家が所蔵していた資料の謄写に取り組み始めていた。①②の謄写本は、大隈家が所蔵していた卷子の原本（現在早稲田大学図書館所蔵）と、大日本文明協会が保管していた謄写綴（現在所在不明）を底本としていて、このうち初めて存在と内容が明らかになったものは、一通だけであった。しかし③の謄写本「大隈侯爵家文書・諸家書翰」は底本や作成時期が不明であるだけでなく、従来知られている刊行本や謄写本にもない、新出とも言うべき謄写書翰が多数収録されている。今後、これらの内容を吟味していくと共に、底本を追求していく必要があるだろう。

## 五 刊行本・謄写本

——日本史籍協会編『大隈重信関係文書』・

佐川町立佐川文庫蔵「大隈重信関係文書」稿本

もう一つ、現在では原本の所在が判明しない多くの謄写・活字書翰が収録されているのが、日本史籍協会編『大隈重信関係文書』とその稿本である。これについても既に調査報告が発表されているが、若干の補足を加えておきたい。<sup>(59)</sup> 前述したように、大隈邸での調査・整理は少人数で行なわれ、資料群の全体像はすぐに明らかにされたわけではない。一九二二年に報知社が『風雲感会』を刊行したあとは、一九二六年（昭和三）に伝記『大隈侯八十五年史』が刊行された際に一部が引用され、また附録『風雲偉観』に大隈宛を含む書翰一六二通の影写が掲載されたにとどまっていた。研究者を含めて、多くの人がその内容を知ることができたのは、一九三四（昭和九）年の日本史籍協会編『大隈重信関係文書』の刊行以降である。これは日本史籍協会叢書の一つで、第一巻が同年七月二五日に刊行され、最終巻の第六巻は翌年四月二五日に刊行された。

史籍協会本の収録書翰の多くがセンター本と重複しているが、中にはセンター本にはない活字書翰が存在する。全六巻に収録されている大隈宛の日本人和文書翰全一〇二〇通のうち、二二二通は原本の所在が確認できなかったため、センター本では収録は見送られた。<sup>(60)</sup> したがってこの二二二通の内容は、史籍協会本からしか知ることができない。

そして史籍協会本の稿本には、従来知られていなかった大隈宛の謄写書翰が存在することが、近年の調査で明らかになった。<sup>(61)</sup> 日本史籍協会叢書の稿本は、副総裁の田中光頭の郷里高知県佐川町にあり、彼が一九二六（大正一五）年

に寄贈した分は青山文庫に、その後寄贈した分は佐川文庫に収蔵されている<sup>(62)</sup>。全部で二一点ある『大隈重信関係文書』の稿本の一つに、表紙に「大隈文書第六卷以外ノ分」と記された謄写本がある。「大部分年代不明ニツキ使用セズ」との理由で、最終的には収録対象から外され、活字化されなかつた分である。ここに一二六 points の書翰と書類が謄写されていたが、このうち大隈宛の日本人和文書翰をセンター本と照会した結果、未収録のものが八通あることが確認された。これらも原本の所在は不明で、史籍協会本にも収録されていないため、大隈研究にとって貴重な資料と判断し、その全文翻刻を前号で紹介した。

したがって、史籍協会本とその稿本を合せて、少なくとも二二〇通の大隈宛の日本人和文書翰が、中には、一九二八年に個人に進呈されたものも含まれるかもしれないけれども、早稲田大学への寄贈とは別系統で伝来されている可能性がある。

ところで、史跡協会本の編纂作業はどのような形で進められたのであろうか。残念ながら、編纂作業の業務過程や期間等を示す資料は存在しないが、第一巻の冒頭にある大隈信常の緒言と日本史籍協会の例言によって、臨時帝室編修官の渡辺幾治郎が「文書の選択編纂」「傍註、備考、参考文書等の添付」を行ない、維新史料編纂官の薄井福治が「整理校訂」を担当したことがわかる。渡辺は自著『大隈重信…新日本の建設者』<sup>(63)</sup>の序文で、次のように記している。

私は大隈重信侯の研究を志すこと年あり、曩年大隈侯爵家の依頼に依り、その所蔵文書を整理し、大隈重信関係文書全六巻を公刊した。また、昭和七年十月故侯十年の記念に当り、国民敬慕会の嘱によって、『文書より観たる大隈重信侯』一巻を著し会員に頒つた。主として侯爵家文書の整理及び刊行によって得た資料研究の産物であつた。

当初は市島が中心になって進められていた整理・調査は、ある時期から渡辺に引き継がれたのであろう。前述の緒

言と例言に記されている年日と、『文書より観たる大隈重信侯』<sup>(64)</sup>の刊行年月が一致しているので、一九三二年一〇月には「文書の選択編纂」がある程度完成していたと推定される。

渡辺が大隈文書の整理を担当ようになった理由の一つとして、彼が臨時帝室編修局の一員であったことが挙げられよう。既に触れたように、渡辺は同局による謄写本作成の責任者で、大隈家との交渉を担当していた。大隈の死から四ヶ月後の一九二二年五月九日、市島の日記に「朝、渡辺幾次郎来話」と記されている。<sup>(65)</sup>五月二五日に同局が大隈家から「明治元年三月御親翰写（木戸孝允公真蹟）」の借入を行なっているので、話の内容はこのことに関するものであったと思われる。そして翌年四月一二日、渡辺は大隈侯伝記編輯所を訪問し、市島に「明治天皇史編纂のため志料の一覧」を依頼し、若干の資料を閲覧している。<sup>(67)</sup>その後の動向は不明であるが、大隈家が所蔵する資料群の借入に向けて、渡辺は種々の準備を進めていたと思われる。そして一九二八年（昭和三年）六月一日、大隈家に一回目の借入の申し入れがなされて以降、<sup>(68)</sup>数回にわたって資料の借入が実施されたのである。おそらくこの間に、渡辺が文書整理を担当するようになったのであろう。

したがって、臨時帝室編修局による謄写本の作成と、日本史籍協会編『大隈重信関係文書』の稿本作成は、渡辺幾治郎を中心として、ほぼ同時並行で進められた可能性は極めて高い。というよりも、むしろ渡辺が長年にわたって文書整理と謄写本作成を担っていたからこそ、史籍協会本の刊行が実現したと言えよう。この推測が妥当かどうかは、今後の課題としたい。

## おわりに

ここまで、所在が現在確認できる「大隈重信関係文書」、特に大隈宛の日本人和文書翰の原本の来歴を整理し、次に大学史資料センター編『大隈重信関係文書』以外の刊行本・謄写本の概要や作成過程等を紹介してきた。最後に、これまでの記述を踏まえて、大隈重信関係文書、とりわけ書翰がどのような経緯で伝来したのかを再整理してみたい。

大隈の許に集積していた資料群が、最初に本格的に整理されたのは一八八二（明治一五）年九月頃である。実務担当者には神山聞であった。しかし市島謙吉の談話によると、整理後に小野梓が伝記編纂のために大隈宛書翰を含めた資料の借入を行なったが、彼が死去したのちに所在不明となった。通数や内容は分からないが、ここで大隈文書の一部が散逸してしまったのであった。

その後、整理されることなく集積していった資料群は、大隈の死後に市島を中心として調査・整理が実施されることになった。先に指摘したように、市島によつて、大隈死後の原形は大きく変更されていて、アーカイブにおける秩序尊重・原形保存という原則からすると、非常に問題があったと言わざるを得ない。しかし大隈関係文書の原本の多くがいま現存しているのは、市島の尽力によるところが大きい。そして大隈家に長らく保存されていた大隈宛書翰の原本は、一九四九（昭和二四）年早稲田大学に、一九七六（昭和五一）年早稲田大学大学史編集所（現大学史資料センター）に寄贈されたのであった。

しかし戦後の寄贈までの間に、大隈宛書翰の原本が大隈家からいくつ分散していたことが分かった。資料上確認できるのが、一九二八（昭和三）年九月の高田早苗ら一九名と、同年一月の鍋島侯爵家徴古館（現公益財団法人鍋島報

效会」と大隈誕生記念館（現佐賀市大隈記念館）である。この総計三一七通のうち、原本の所在は現在一五四通しか確認できていない。今後新たに見い出されることを期待したい。

そして市島による調査・整理後に作成されていた各種の謄写本、そして史籍協会本の内容を検討した結果、これ以外にも大隈家から他箇所へ分散した、早稲田大学への寄贈分とは別系統の大隈宛書翰の原本が存在する可能性が明らかとなった。特に、臨時帝室編修局による「大隈侯爵家文書・諸家書翰」四冊（作成時期不明）には、センター本のみならず、史籍協会本に収録されず、他の謄写本にもない書翰の謄写が多数ある。なお本文で紹介した史籍協会本や謄写本は、原本と照合できないため翻刻の正確性に若干の問題点があるけれども、大隈研究を進めていく上で有益な情報が得られる貴重な資料である。特に、各種の謄写本にしかない書翰のうち、まだ未紹介は何らかの形で発表していく必要がある。

センター本の完成によって、大隈文書のうち大隈宛の日本人和文書翰の内容を、より多くの人びとが知る機会が大きくなり、今後、大隈研究の更なる促進が期待される。しかしこれですべての書翰が網羅できたわけではない。写真版や翻刻がありながら原本の確認ができないため収録を見送ったものもあり、また編纂事業の完結後に公開されたものも出てきている<sup>(70)</sup>。大隈とその周辺の人びとの実相により近づくべく、今後も資料収集と紹介が進められていくことを期待したい。

## 註

を参照されたい。

- (1) 収録対象の詳細は、早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』第一巻（みすず書房、二〇一五年）
- (2) 早稲田大学図書館所蔵。請求番号、14 A5233。
- (3) 佐賀県立図書館所蔵「東京寄留人名簿」に、「有楽町三丁目式番地大隈重信邸寄留 神山間（旧名逸郎）」とあり、
- の「凡例」と「大隈重信関係文書」の完結にあたって「



- また国立公文書館蔵「職員録・明治八年一〇月」には、大蔵省国債寮七等出仕に名前が記されている。
- (4) 早稲田大学大学史資料センター所蔵「大隈重信関係文書」に、神山による「金銭受払精算簿」(7才24)が残っているので、執事的な立場にあったとも考えられる。
- (5) 市島謙吉「大隈家の書簡調べ」(大日本文明協会編『文明協会講演集』七、一九二二年)一―二頁。
- (6) 早稲田大学図書館所蔵。請求番号マ06 03215。
- (7) 図録「二〇二二年度秋季企画展・早稲田大学創立一二〇周年記念 大隈重信と小野梓 建学の礎展」(早稲田大学大学史資料センター、二〇二二)五頁。
- (8) 早稲田大学図書館所蔵「双魚堂日誌 大正一〇年一〇月以降、大正一一年」(請求番号マ04 01919-583) 一九二二年一月二日条。
- (9) 「双魚堂日誌 大正一〇年一〇月以降、大正一一年」一九二二年一月二日条。
- (10) 出席者は、大隈信常・市島・塩沢・平沼淑郎・坂本三郎・坂本嘉治馬・中野礼四郎・堀内文次郎・増田義一・頼母木桂吉(「双魚堂日誌 大正一〇年一〇月以降、大正一一年」一九二二年一月二日条)。
- (11) 「双魚堂日誌 大正一〇年一〇月以降、大正一一年」一九二二年一月二日条。
- (12) 早稲田大学図書館所蔵「双魚堂日誌 大正一二年二月以降」(請求番号マ04 01919-584) 一九二二年二月二八日条。
- (13) 「双魚堂日誌 大正一一年二月以降」一九二二年三月二日条。
- (14) 早稲田大学図書館所蔵「双魚堂日誌 大正一二年一月以降」(請求番号マ04 01919-586)。
- (15) 一八九四(明治二七)年二月二六日に、『郵便報知新聞』から改称。
- (16) 青木武雄『報知七十年』(報知新聞社、一九四一年)六三―六四頁。
- (17) この書類の原本は、現在、早稲田大学図書館所蔵「大隈文書」にある(請求番号B33614)。市島が大隈自筆と判断したもので、『実業之日本』一五(二)(実業之日本社、一九二二年)や『大隈侯一言一行』(早稲田大学出版部、一九二二年)などに口絵として掲載されている。しかし真偽は不明。この他に収録された書翰の原本もすべて早稲田大学図書館に所蔵されていて、センター本に翻刻が掲載されている。
- (18) 「双魚堂日誌 大正一一年二月以降」一九二二年三月六日条。
- (19) 早稲田大学図書館所蔵「双魚堂日誌 大正一一年七月以降」(請求番号マ04 01919-585) 一九二二年七月九日条。
- (20) 早稲田大学図書館所蔵。請求番号マ05 03380。小精廬主人は、市島謙吉の号の一つ。
- (21) 上は早稲田大学大学史資料センター編『早稲田大学史記要』四五(二〇一四年三月)に、下は同編『早稲田大学史

- 記要』四六(二〇一五年三月)に収録されている。
- (22) 市島の日記「双魚堂日誌 大正一一年二月以降」五月一日条に、「渡辺幾次郎<sup>ワタノベ</sup>之紹介にて森潤太郎来訪。此ものを大隈家書簡謄写に採用する事となす」とあって、渡辺幾治郎もこの謄写本作成に関与していたことが分かる。
- (23) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第三卷(早稲田大学出版部、一九八七年)一七五頁。
- (24) 同書一七五頁。早稲田大学校友会『早稲田大学学報』一(一九四九年)に、六月一日に大隈信幸氏から寄贈されたことが記載されている(三頁)。早稲田大学大隈研究室編『大隈文書目録』(早稲田大学図書館、一九五二年)の序に、昭和二五年六月寄贈とあるのは誤記であろう。
- (25) 佐藤能丸編「大隈信幸氏寄贈文書」目録(早稲田大学大学史編修所編『早稲田大学史記要』一二、一九七九年収録)。
- (26) 早稲田大学大学史資料センター「大隈重信関係文書」33-3。
- (27) 早稲田大学図書館所蔵「戊辰漫録」四(請求番号 104 019194)昭和三年九月四日条。
- (28) 詳細は、佐藤能丸「高田早苗論」(早稲田フォーラム)編集委員会編『早稲田フォーラム』五七、五八(早稲田大学出版部、一九八九年)収録)などを参照されたい。
- (29) 早稲田大学図書館所蔵「大隈家旧蔵 風雲書簡」(請求番号 104 09354)。近日中に公開される予定。
- (30) 詳細は、金子宏二「春城・市島謙吉——その生涯と大隈重信」(『早稲田フォーラム』五七、五八収録)などを参照されたい。
- (31) 早稲田大学図書館所蔵「大隈重信宛書簡 乾、坤」(請求番号 103 08816 0066)。同資料には原安三郎所蔵を示す印があり、「原安三郎蒐集書画書簡」となっている。これを市島田蔵とする根拠は、前掲した市島の日記「戊辰漫録」の記述である。第一に、本文に引用した一九二八年九月四日条の中略部分に、書翰の差出人の氏名が記されていて、これが本資料と一致すること。第二に、進呈された書翰の内容に関する記述が、本資料の卷子にある書翰の内容と一致すること。例えば、①「光演の句入の一通」(センター本第一一巻・補遺38)、②「上野景範か老侯に梅の盆栽を無心を云はれ解語の花にあらざる此ものは惜むに足らずと書きたる書状」(同上第一一巻・補遺26-2)、③「福羽美静の手紙の中に坪内逍遙のことに及んでいる」(同上第九卷118-9)である。以上より、市島田蔵と判断して問題ないと思われる。
- (32) 詳細は、小松芳喬「塩沢昌貞考」(『早稲田フォーラム』五七、五八収録)などを参照されたい。
- (33) 卷子に仕立てられておらず、書翰各に登録されている(請求番号 106 09233)。
- (34) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第一卷(早稲田大学出版部、一九七八年)、早稲田中・高等学校校

- 史編纂委員会『百年の軌跡』（早稲田中学校、一九九五年）など。
- (35) 早稲田大学史資料センター所蔵「早稲田中学校高等学校寄贈 大隈重信関係文書」。
- (36) 実業之日本社史編纂委員会編『実業之日本社百年史』（実業之日本社、一九九七年）など。
- (37) 早稲田大学史資料センター所蔵「増田義一関係文書」。
- (38) 大隈侯八十五年史編纂会編『大隈侯八十五年史』（大隈侯八十五年史編纂会、一九二六年）、霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修旧華族家系大成』上巻（霞会館、一九九六年）など。
- (39) 坂本守正編『坂本嘉治馬自伝』（富山房、一九三九年）、早稲田大学校資名鑑編集委員会編『早稲田大学校資名鑑』（奥島孝康、二〇〇二年）など。
- (40) 原田積善会編『原田二郎伝』下巻（原田積善会、一九三八年）、『早稲田大学校資名鑑』など。
- (41) 「付録其一八 副島延二」（堀部久太郎編『大隈熊子夫人言行録』（伝紀刊行会、一九三四年）収録）。
- (42) 霞会館華族家系大成編輯委員会編纂『平成新修旧華族家系大成』上巻。
- (43) 『平成新修旧華族家系大成』下巻（霞会館、一九九六年）。
- (44) 『追悼』『山岳』六〇（一一九）、日本山岳会、一九六五年）。
- (45) 早稲田大学大隈研究室『大隈研究』第一輯（早稲田大学社会科学研究所、一九五一年）収録。
- (46) 前者の鍋島侯爵家徴古館長宛が「大隈家書翰」（早稲田大学史資料センター「大隈重信関係文書」23-7）で、後者の大隈誕生記念館宛が「大隈家書翰」（同上23-8）である。
- (47) 書陵部所蔵資料目録・画像公開システム (<http://toshoyokunaicho.go.jp/kojunsho>)。
- (48) 「戊辰漫録」四、昭和三年九月四日条。
- (49) 早稲田大学史資料センター「大隈重信関係文書」23-2。
- (50) 早稲田大学図書館所蔵。請求番号 Y14 A5224。
- (51) 早稲田大学図書館所蔵。請求番号 Y14 A5225。
- (52) 宮内庁宮内公文書館所蔵「明治天皇紀編修録」で、大正四年から昭和一四年までのものが存在する。
- (53) 識別番号 34405。
- (54) 各資料の書誌情報は以下の通り。「大隈侯爵家所蔵文書一 五代友厚書翰」（識別番号 34406）。「大隈侯爵家所蔵文書二 松方正義書翰」（識別番号 34407）。「大隈侯爵家所蔵文書三 陸奥宗光書翰」（識別番号 34408）。「大隈侯爵家所蔵文書四 木戸孝允書翰」（識別番号 34409）。「大隈侯爵家所蔵文書五 大久保利通書翰一」（識別番号 34410）。「大隈侯爵家所蔵文書六 大久保利通書翰二」（識別番号 34411）。「大隈侯爵家所蔵文書七 岩倉具視書翰一」（識別番号

- 3412)。「大隈侯爵家所蔵文書八 岩倉具視書翰二」(識別番号 3413)。「大隈侯爵家所蔵文書九 寺島宗則書翰」(識別番号 3414)。「大隈侯爵家所蔵文書一〇 島義勇書翰」(識別番号 3415)。「大隈侯爵家所蔵文書一一 三条実美書翰一」(識別番号 3416)。「大隈侯爵家所蔵文書一二 三条実美書翰二」(識別番号 3417)。「大隈侯爵家所蔵文書一三 佐野常氏書翰」(識別番号 3418)。「大隈侯爵家所蔵文書一四 後藤象二郎書翰」(識別番号 3419)。「大隈侯爵家所蔵文書一五 黒田清隆書翰(抄録)」(識別番号 3420)。「大隈侯爵家所蔵文書一六 徳大寺実則書翰(抄録)」(識別番号 3421)。「大隈侯爵家所蔵文書一七 井上馨書翰」(識別番号 3422)。「大隈侯爵家所蔵文書一八 井上馨書翰二(抄録)」(識別番号 3423)。「大隈侯爵家所蔵文書一九 伊藤博文書翰一」(識別番号 3424)。「大隈侯爵家所蔵文書二〇 伊藤博文書翰二」(識別番号 3425)。「大隈侯爵家所蔵文書二一 伊藤博文書翰三(抄録)」(識別番号 3426)。
- (55) 識別番号 34406。
- (56) 識別番号 34424。
- (57) 各資料の書誌情報は以下の通り。「大隈侯爵家文書甲・諸家書翰・速達三八五点」(識別番号 34401)。「大隈侯爵家文書乙・諸家書翰・速達二八五点」(識別番号 34402)。「大隈侯爵家文書丙・諸家書翰・速達二八五点」(識別番号 34403)。「大隈侯爵家文書丁・諸家書翰・速達三八五点」(識別番号 34404)。
- (58) 国立国会図書館憲政資料室所蔵の一八七三(明治六)年二月一六日付の岩倉具視書翰である(原本:憲政資料室収集文書「岩倉公北海開拓人事意見其他」<sup>112</sup> 3、翻刻:センター本第一一巻追補10<sup>11</sup>)。なおセンター本には、海の見える杜博物館が所蔵する岩倉具視書翰の控(第一一巻追補10<sup>13</sup>)を収録したが、この謄写本「大隈侯爵家文書・諸家書翰」にはその清書と見られる書翰が謄写されている。
- (59) 早稲田大学史資料センター編『大隈重信関係文書』編集担当「日本史籍協会編『大隈重信関係文書』調査報告」(早稲田大学史資料センター編『早稲田大学史記要』四六(早稲田大学史資料センター、二〇一五年三月))。
- (60) 詳細は、前掲論文「日本史籍協会編『大隈重信関係文書』調査報告」の「日本史籍協会編『大隈重信関係文書』刊本 調査報告」を参照されたい。
- (61) 詳細は、前掲論文「日本史籍協会編『大隈重信関係文書』調査報告」の「佐川町立佐川文庫蔵『大隈重信関係文書』稿本 調査報告」を参照されたい。
- (62) 詳細は、安岡憲彦「日本史籍協会叢書」の原稿と佐川文庫「『地方史研究』四四(四)、一九九四年」、高田祐介「『日本史籍協会叢書』稿本の伝存と構成」(明治維新史学会編『明治維新と史料学』吉川弘文館、二〇一〇年)を参照されたい。
- (63) 照林堂書店、一九四三年九月。
- (64) 早稲田大学出版部、一九三二年一〇月。

- (65) 「双魚堂日誌 大正一二年二月以降」一九二二年五月九日条。
- (66) 宮内庁宮内公文書館所蔵「明治天皇紀編修録一 大正一年」(識別番号11266)。
- (67) 早稲田大学図書館所蔵「双魚堂日誌 大正一二年一月以降」(請求番号 Y04 01919-586) 一九二三年四月二二日条。
- (68) 宮内庁宮内公文書館所蔵「明治天皇紀編修録二 昭和三年」(識別番号11272)。
- (69) 例えば、佛敎大学近代書簡研究会編『元勳・近代諸家書簡集成・宮津市立前尾記念文庫所蔵』(宮津市、二〇〇四)に、大正五年一〇月付の大隈宛田尻稻次郎書翰が収録されていたが、原本を確認できなかったため、センター本への収録は見送られた。
- (70) 例えば、国立国会図書館憲政資料室にて、二〇一五年六月二五日、「副島八十六関係文書」が新規公開された。副島が『開国五十年史』編纂局の一人であったこともあり、ここに大隈宛書翰が四通含まれている。